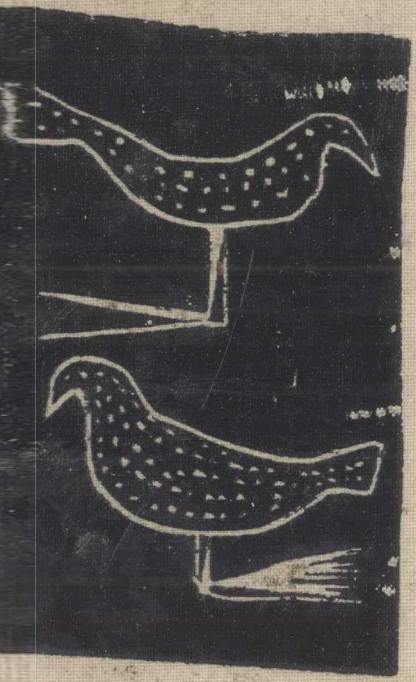

少年讚歌

三浦哲

少年讃歌

三浦哲郎

文藝春秋刊

少年讃歌　奥付
昭和五十七年十一月一日　第一刷
昭和五十八年　三　月十日　第二刷
定価　二〇〇〇円
著　者　三浦哲郎（みうらてつお）
装幀者　司　修
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
郵便番号一〇二
電話東京(〇三)二六五局一二一一
印刷　精興社
製本　矢嶋製本
製函　加藤製函
Tetsuo Miura
© 1982
Printed in Japan
万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

少年讃歌

三浦哲郎著

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序章

天正八年の四月初旬、肥前有馬の日野江城下に開設された切支丹の学問所（セミナリヨ）に、コンスタンチノ・ドラードという名の少年がいた。

学問所（セミナリヨ）というのは、そのころ日本での布教を独占していたイエズス会の巡察師父アレッサンドロ・ヴァリニャーノの発案で、京都（みやこ）に近い安土と九州（しゅう）の有馬の二個所に作られた小神学校だが、有馬の学問所（セミナリヨ）には開設当時二十二人の生徒がいて、教理のほかに、ラテン語やポルトガル語、国文学、それに声楽や器楽を学んでいた。

生徒たちは、いずれも由緒ある家門の子弟で、下は十歳から、上は十五歳までの少年ばかりである。

コンスタンチノ・ドラードもその生徒たちの一人であったが、彼だけは、別段家柄の出でもないことや（天涯の孤児である上に、もともとは教会堂で宣教師の仕事を補佐する同宿（どうじゅく）の身にすぎなかった）、時には教師の司祭（パーデレ）や修道士（イルマン）たちと生徒たちとの間に立って通辞の役をしたりすることで、学問所（セミナリヨ）のなかでも異色の存在になってい

た。

学問所の教師たちといっても、全員が南蛮の国々からはるばる海を渡って布教にきた伴天連だから、教え方が不馴れな上に話す言葉もたどたどしい。ただ学問所で一緒に暮らすだけなら片言でも足りるが、人に物を教えるとなると、そうはいかない。ところが、ドラードは、ポルトガル口に堪能で、ほかにエスパニア口とイタリア口も幾らか話すことができた。開設当時、有馬の学問所にはポルトガル人の教師が多かったから、ドラードのような生徒がいてくれると重宝である。しばしば、教師たちの言わんとするところを立ち所に九州の言葉に嚙み砕いて生徒たちに伝える役をさせられるのは、仕方のないことであった。

そのころ、豊後の府内の修練院に、ジョアン・デ・トルレスという修道士がいて、これが日本人でポルトガル口のわかる唯一の人だといわれていたが、この修道士が、いつかドラードが学問所の教師の供をして府内を訪れた際、そこにいるポルトガル人の司祭となに不自由なく話すのをそばで聞いていて、これはてっきりポルトガル人だと思ったと、後で彼に打ち明けたことがある。

このことは、ドラードのポルトガル口が当時としてはまず相当なものだったという証拠になるが、トルレスがドラードのことをポルトガル人だと思ったのは、おそらく言葉のせいばかりではなかっただろう。ドラードは、日本人には珍しく彫りの深い顔立ちをしている。目は大きくて、睫毛は長く、白目が澄みきっているせいか、光の当り具合で目全体が幾らか青味がかって見えることがある。髪も栗色で、手入れを怠っていると、いよいよ赤味が目立ってくる。顔はそれほどでもないのだが、腕は産毛がむさくるしいほどに濃い。その上、わずか十四、五で達者なポルトガル口を操るのだから、初めての人は誰もおなじ日本人だとは思わない。日本人によく似た顔立ちをしたポルトガル人だと思う。

けれども、ドラードはポルトガル人ではなかった。それかといって、自分はまじりけのない日本人だといい切る自信は、ドラードにはなかった。日本で生まれて、日本で育ったから、自分では日本人だと思っているが、子供のころから、なにかというと、やい、合の子、南蛮人との合の子と、からかわれたり囃し立てられたりして育

ってきたからである。

ドラードは、自分の父親も、母親も知らない。赤子のときから、どちらもそばにいなかったから、親というものの顔を見たことも、親を呼んだ記憶もない。だから、自分の日本人離れのした容貌のことも、父親が南蛮船の男らしいという風の噂も、そのほか自分自身についての知識は、なにもかも周囲の他人たちから与えられたものばかりである。

彼は、幼子のころから他人の手を転々として、慈悲深い老伴天連に引き取られてからは、あちこちの住院（レジデンシア）を渡り歩いて、司祭や修道士の走り使いをしたり、一緒に布教の旅を重ねたりしながら育った。ポルトガル口（ぐち）をはじめ異国の言葉が身に着いたのは、もう十年近くもそんな暮らしをしてきたからで、なにも父親がポルトガル人だからではないのである。

もはや真偽のほどは確かめようもないが、自分の父親だと伝えられている南蛮男については、こんな知識の断片がある。勿論、専ら司祭や修道士たちから拾い集めた知識にすぎないが、その男は永禄八年に、ドン・ジョアン・ペレイラの船で大村領の福田浦に着いた。ポルトガル船が福田浦に錨を下ろしたのは、これが初めてで、その前年までは、おなじ大村領の横瀬浦に入っていた。横瀬浦の前には、十年余りの間、毎年のように松浦領の平戸にきていた。

十年余りも馴染んだ平戸の港を避けるようになったのは、領主の松浦隆信が伴天連嫌いで、南蛮船を手懐けては交易の利益を貪る一方、裏ではその船で渡来する伴天連たちに陰険な迫害を繰り返したからである。当時は、イエズス会が布教上の都合で投錨地を指図していたから、南蛮船が平戸に寄りつかなくなったのは当然であった。

南蛮船は、戦国時代に相応しい銃砲、硝薬、皮革などのほかに、生糸や織物を満載してきたから、どこの港でも歓迎されたが、横瀬浦に着くようになると、領主の大村純忠はさっそく浜の一部をイエズス会に委ねて、むこう十年間を免税とした上に、翌年には自ら進んで洗礼を受けて、切支丹の信徒になった。けれども、領主のそん

な切支丹への傾倒ぶりが領内の叛臣を煽ることになり、忽ち乱が起こって、賑わいはじめた横瀬浦は悉く戦火に焼き払われてしまった。

その翌年が永禄八年で、ドン・ジョアン・ペレイラの船は横瀬浦の廃墟を見て驚いたが、いまさら平戸へも戻り兼ねて、福田浦に錨を下ろした。ところが、ここに碇泊中のある朝、船に思わぬ災難が降りかかってきた。かねがね南蛮船がしきりに大村領へ来航するのを妬んでいた平戸の松浦が、ちょうど平戸にきていた堺商人の大型船十艘ほどをそそのかし、それに軍兵の小舟七十艘を加えて、大挙して押し寄せてきたのである。

松浦方の船隊は、船のまわりをひしひしと取り囲んでから、一斉に火縄銃を撃ち込んできた。砲術長と、ほかにも二人のポルトガル人が弾に当って死んだ。ドン・ジョアン・ペレイラの頭にも一つ当ったが、防弾鉄兜に跳ね返って、あやうく難を免れた。

船のなかには、奴隷のほかに七十人ほどのポルトガル人がいたが、不意打ちなので、大砲を放つ用意が整わない。どうなることかと思っているうちに、運よく一緒に碇泊していたマラッカのガレオン船が、威勢よく援護の砲撃をしてくれた。松浦方の船隊は、舷を接してひしめき合っているから、ガレオン船の砲弾は撃つたびに当った。

戦闘は二時間余りもつづいたが、松浦方は大型船が三艘撃破されると、ようやく略奪を諦めて引き揚げていった。船の上では八人が死んで、一人が重傷を負っていた。けれども、松浦方でも八十人が死んで、百二十人が傷を負ったことが、後でわかった。

船の重傷者は、すぐ陸へ運ばれて手当を受けて、あやうく命を取り留めた。まだ出帆までには大分間があったから、彼はそのまま陸で傷の療養をつづけたが、傷が直ると、船に戻って、やがて北風の季節にマカオへ去った。

その男がおぬしの父親だというのが世間の教えであったが、ドラード自身はそれを信じているわけではなく、ただ幼いころに植えつけられた屈辱の記憶の一つとして頭の隅に留めているだけである。母親のことは、諫早の女だということのほかは、なにもわからない。諫早の女が南蛮船の出入りする福田浦でなにをしていたのか。母

親が自分を捨てたのか、それとも自分を残して先に死んでしまったのか。なにもわからない。伴天連たちも、母親の話になると、口を閉ざして自分の考えを打ち明けてくれなかった。顔をゆっくり左右に振り動かして、ただ母親のために祈るようにというだけである。

ドラードは、早くに洗礼を受けて、コンスタンチノという教名を貰った。ドラードという南蛮風な名は、子供のころに彼を引き取ってくれた老伴天連がつけてくれたのである。それまでは、彼は金谷と呼ばれていた。なぜだかわからない。金谷というのは、地名だろうか。ほかには考えられないが、彼にはなんの憶えもない。それなのに、なぜだか子供のころから金谷という名が絶えず彼に付き纏っていた。けれども、老伴天連は、金谷という名に顔を顰めた。南蛮言葉でカナヤといえば、悪党という意味だということであった。これから南蛮人ばかりの住院で暮らすことになるというのに、悪党と呼んだり呼ばれたりするのでは、面白くない。老伴天連はそういって、金谷に南蛮読みを当て嵌めてドラードと名付けてくれたのである。コンスタンチノ・ドラードになると、彼は急に自分が別な人間になったような気がした。自分は生まれ変ったのだ。彼はそう思いたかった。

有馬の学問所の生徒になる前、彼は博多で布教の手伝いをしていた。ところが、天正八年の春先に、住院の神父から急に肥前の有馬へ移るようにといわれた。近々、有馬に学問所が開設されるが、巡察師父のヴァリニャーノはそこの初代の院長にメルキオル・デ・モーラを任命した。モーラ神父がおまえを有馬に招んでいる。住院の神父はそういった。

ドラードは、エスパニア人のモーラ神父のことなら、よく知っていた。その神父は、三年前の天正五年にインドのゴアから長崎に着くと、すぐ博多へ派遣されてきて、一年半ほど一緒に暮らしたからである。モーラ神父の話す日本口は、あまり達者だとはいえなかった。それで、博多にいる間、暇を見付けてはドラードを呼んで日本口の稽古台にしていた。

ドラードは、有馬へ旅をして、学問所を開く準備を手伝った。学問所が出来ると、そんな身分ではないと思ったが、薦められるままに生徒になった。やがて、モーラ神父が自分を招び寄せたわけがわかった。教師と自分の

哲学研修を兼ねて学問所へ赴任してくる若い修道士たちは、みな揃いも揃って日本口がひどくお粗末だったからである。

初め、学問所の建物は、領主の有馬晴信から寄進を受けた寺を改造したもので、まず、南蛮風の寺子屋といってよかった。けれども、生徒たちは厳格な日課に従って規則正しい暮らしをしていた。建物の前には、寺の前庭を作り直した運動場もあった。その運動場のむこうには、静かな有明の海が広々とひろがっていて、右手の小高い丘の上に日野江城が見えた。

その年のうちに、新しく教会を建てる工事がはじまった。巡察師父のヴァリニャーノは、十月まで近くの口之津にいて、時々工事の進み具合を見にきては、ついでに学問所の講義を見学していった。翌天正九年には、三階建ての、簡素でどっしりとした教会が完成した。巡察師父が旅から帰ると、学問所を絵や花や紙の飾りで綺麗に装って歓迎の会が催され、その席には領主の有馬晴信とその供回りも招待された。晴信はまだ十五だったが、すでに洗礼を受けてプロタジオの教名を受けていた。

このプロタジオの有馬晴信と、バルトロメオの大村純忠と、それに豊後のフランシスコの大友義鎮と、この三人の切支丹領主の名代として、有馬の学問所の生徒をローマへ送るという話が突然持ち上ったのは、その年も暮に近くなってからである。長崎に帰っていた巡察師父から、急ぎの使者がきて、学問所から次の八人が選び出された。

伊東マンショ（大友ドン・フランシスコの名代として）
千々石ミゲル（大村ドン・バルトロメオ及び有馬ドン・プロタジオの名代として）
中浦ジュリアン（副使として）
原マルチノ（副使として）
いるまんディオゴ・デ・メスキータ（使節の後見人として）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いるまんジョルジ・ロヨラ（使節の世話役として）
コンスタンチノ・ドラード（従者として）
アウグスチノ（従者として）

日本を離れる南蛮船は、二月の強い北風に帆を張って南下する。その二月がつい目前に迫っていて、ゆっくり別れを惜しむ暇もない。旅支度を急がなければならなかった。

第一章

一

旅立ちの朝は、いつものように、修道士(イルマン)ジョアン・デ・ミランの打ち鳴らす板木の音とともに明けた。高窓から、星の瞬いている夜明けの空が見えていた。朝のお祈りをしている間、近くの川音のほかにはなにもきこえなかった。夜中に裏の林を揺さぶっていた風が、いつの間にか落ちている。旅立ちといっても、まず口之津から長崎まで帆のない小舟の旅をするのだから、風がないのはなによりであった。

お祈りのあと、日課通りに弥撒(ミサ)と主禱文を唱え、座敷を清掃してから、すぐ旅支度をして、院長はじめ学問所(セミナリヨ)

の教師たちや生徒の仲間たちに暇乞いをした。学問所では、開校以来この二年の間に、教師が二人殖えて五人になり、生徒の仲間も四人殖えて全部で二十六人になっていた。けれども、いま、このうちから二人の修道士と、一人の同宿と、五人の生徒の合わせて八人が、学問所を離れてまだ誰も経験したことのない長旅に出ようとしている。

院長のメルキオル・デ・モーラ神父は、一人々々を両腕で包み込むように抱き締めて、道中の無事を祈ってくれた。

「コンスタンチノよ。」

院長は私を抱いてくれたとき、私の耳に頬を当てて囁いた。

「世間がおまえの父親の国だといっているポルトガルへいっておいで。こんな機会はもう二度とあるまいから、ヨーロッパの国々をよく見ておいで。でも、父親を捜そうなどとは思わぬ方がいい。おまえには、ちいさな使節たちの面倒を見るという役目のほかに、巡察師父が期待を寄せている大事な使命があるのだから。主よ、この小羊をお守りください。」

エスパニア人の院長は、私によくわかるようにポルトガル口でそういってくれた。

従者としてのほかに私に与えられていた使命というのは、ポルトガルで活字印刷というものの技術と活字鋳型の彫刻を学び、巡察師父がすでに注文してあるという印刷機をこの国へ持ち帰ることであった。私は、このたびの使節の一行に自分も加えられるということを知ったとき、いかに従者とはいえ、大勢のなかからなにゆえ自分のような孤児が選ばれたのか、それが不思議でならなかった。このまま黙ってお受けしていいものかどうかわからなかった。それで、院長に伺いを立ててみたところ、院長は、実はといって私とロヨラ修道士とに与えられた別の使命について語ってくれたのである。

院長によれば、いまの日本には活字で印刷された書物は一冊もない。勿論、印刷機もなく印刷技術を身につけた職人もいない。けれども、学問所には教科書が要るし、布教にもやはり、この国に不馴れな司祭や修道士たち

の言葉の不足を補うための書物が要る。この国の信者たちが、誰でも、いつでも必要なときに繰り返し読めるような、この国の言葉で教えを説いた書物を創らねばならない。そういう考えで、巡察師父は、この機会に、手先が器用でポルトガル語に堪能な生徒を一人と、(なにしろ日本文字の活字を作らねばならないのだから)日本人のなかでもとりわけ文字や文章に蘊蓄のある修道士を一人、使節の一行に加えて連れていく決心をされたのだということであった。

私と一緒に印刷術を学んでくることになったジョルジ・ロヨラという修道士は、名前だけは私と同様、南蛮風だが、実はもう五十を過ぎたまじりけのない日本人で、学問所では私たちに専ら読み書きを教えていた。このたびの旅立ちは、急だった上に、巡察師父は親心が使節の少年たちを怯ませることをおそれて、暇乞いの帰郷を許す代わりにそれぞれの家郷へ告別の長い手紙を書かせたが、わずか十三、四の少年たちにまずまず親を納得させられるような手紙が書けたのは、ひとえにロヨラの教えの賜物である。

みんなに送られて学問所を出ると、川むこうにそそり立つ有馬様の城山が裾まで朝日に染まっていた。その城山の裾を洗っている有明の海は、まるで氷でも張り詰めたかのように凪いでいて、時折、刃のように光る陽が眩しかった。

私たちは、学問所に別れを告げて口之津まで歩いた。もしポルトガルの定航船が口之津の港に入っていてくれたら、どんなに手間がはぶけたろう。口之津には、もう足掛け二十年も前から、ルイス・デ・アルメイダ修道士が先代の有馬様から拝領した寺を改造した住院があり、いまでは町の住人のほとんどが切支丹になっている。港にも、ポルトガル船が幾度か来航していて、一昨々年の夏、巡察師父の一行が初めて上陸したのも口之津であった。けれども、去年からイグナシオ・デ・リーマという人の船が長崎にきていて、私たちはそれに乗らねばならなかった。

長崎へいくには陸路もあるが、途中の道筋が古くから有馬様や大村様に敵意を抱いてたびたび戦を仕掛けてくる龍造寺の領地だから、私たちは大事をとって口之津から櫓舟で入海を横切り、茂木から陸に上って長崎へ入る

ことにしていた。

有馬の学問所から口之津までは、南蛮風にいえば二レグワ、一レグワがおよそ一里半だから、三里あまりの道程である。学問所の院長は、何日か前、有馬様の名代の千々石ミゲルを連れてお城へ暇乞いに出向いたとき、屋形様から、出立の際は馬と警固の手勢を遣わそうという申し出があったが、それではあまりに物々しく、それに僧服で馬に乗るのは不都合だからと、お断りしてきたといっていた。実際、私たちはみなカンガというインド産の粗い木綿地で仕立てた僧服を着ていた。真黒で、裾が引きずるように長く、胴のところを縄のように編んだ細帯で締める僧服である。その僧服の上に、いまは肩掛けのような丈の短いマントを羽織っている。これでは馬に乗るより、歩く方が楽である。学問所では、日曜や祝日には餅や果物を携えて、徒歩で遠出を試みるのがならわしであった。三里ぐらい歩くのは、なんでもなかった。

二月の上旬にしては珍しく穏やかな日和に恵まれたが、それにしても、さすがに頭は寒かった。学問所の生徒たちは、巡察師父がおきめになった規則で誰でも頭を綺麗に剃っている。歩いているうちに軀は暖まったが、昨日、旅立ちを前に丁寧に剃ったばかりの頭は、いつまでも冷え冷えとしていた。

おそらく巡察師父は、こんなときのために送ってくださったのだろう、数日前に長崎から小振りな帽子が六つ届いて、それを私たちはめいめい一つずつ手に持っていた。僧服に合わせて真黒の、頭を包む部分が半球形で、廂の大層広い帽子である。けれども、御城下を通り抜けるまで、私たちはほとんどそれをかぶる暇がなかった。道端に、噂を聞いた信者の人々が切れ目なしに待ち受けていて、私たちに励ましや労りの言葉をかけてくれたからである。

御城下を出て、ようやく道端に人影が絶えると、私たちは互いに顔を見合わせながら帽子をかぶった。ミゲルだけは、帽子が頭に合わなかったので、相変らず手に持っていた。ミゲルは美しく整った顔立ちをしていたが、頭がちいさくほっそりとしていて、帽子をかぶると、廂が鼻筋のなかほどまで垂れ下って前が見えなくなるのである。誰のと取り替えてみても、おなじことであった。中浦ジュリアンが気の毒がって、頭と帽子の隙間になに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com